

伝通院

永井荷風

青空文庫

われわれはいかにするともおのれの生れ落ちた浮世の片隅を忘れる事は出来まい。

もしそれが賑にぎやかな都会の中央であつたならば、われわれは無限の光栄に包まれ感謝の涙にその眼を曇らして、一国の繁華を代表する偉大の背景を打目成うちまもるであろう。もしまたそれが見る影もないやせむらやせむら村の端はづれであつたなら、われわれはかえつて底知れぬ懐なつかしさと同時に悲しさ愛らしさを感じずるであろう。

進む時間は一瞬ごとに追憶の甘さを添えて行く。私わたしは都会の北方を限る小石川こいしかわの丘陵をば一年一年に恋いしく思返す。

十二、三の頃まで私は自分の生れ落ちたこの丘陵を去らなかつ

た。その頃の私には知る由もない何かの事情で、父は小石川の邸宅を売払って飯田町いいたまちに家を借り、それから丁度日清戦争の始まる頃には更に一番町いちばんちょうへ引移った。今の大久保おおくほに地面を買われたのはずっと後の事である。

私は飯田町や一番町やまたは新しい大久保の家から、何かの用事で小石川の高台を通り過る折にはまだ二十歳はたちにもならぬ学生の裏うらわ若わかい心の底にも、何なにとはなく、いわば興亡常なき支那の歴史を通読した時のような淋しく物哀れに夢見る如き心持を覚えるのであった。殊に自分が呱呱こごの声を上げた旧宅の門前を過ぎ、その細密こまかい枝振りの一条一条ひとすじにまでちゃんと見覚えのある植込うえこみの梢こずえを越して屋敷の屋根を窺い見る時、私は父の名札なふだの後に見知

らぬ人の名が掲げられたばかりに、もう一足も門の中に進すす入いる事ができなくなつたのかと思うと、なお更にもう一度あの悪戯いたづら書がきで塗り尽された部屋の壁、その窓下へ掘つた金魚の池などあらゆる稚おさな時ときの古跡が尋ねて見たく、現在其処そこに住んでいる新しい主人の事を心憎く思わねばならなかつた。

私の住んでいる時分から家は随分古かつた。それ故、間もなく新しい主人は門の扉まで改築してしまつた事を私は知っている。乃ち私すなわの稚時の古跡はもう影も形もなくこの浮世いんめつからは湮滅いんめつしてしまつたのだ……

*

寺院と称する大きな美術の製作は偉大な力を以てその所在の土地に動しがたい或る特色を生ぜしめる。巴里パリにノオトル・ダムがある。浅草あさくさに観音堂かんのんどうがある。それと同じように、私の生れた小石川をば（少くとも私の心だけには）あくまで小石川らしく思わせ、他の町からこの一区域を差別させるものはあの伝通院でんずういんである。滅びた江戸時代には芝の増上寺ぞうじやうじ、上野の寛永寺かんえいじと相對して大江戸の三靈山と仰がれたあの伝通院である。

伝通院の古刹こさつは地勢から見ても小石川という高台の絶頂でありまた中心点であろう。小石川の高台はその源を関口の滝に発する江戸川に南側の麓を洗わせ、水道端すいどうばたから登る幾筋の急な坂によ

つて次第次第に伝通院の方へと高くなっている。東の方は本郷ほんごうと相對して富坂とみざかをひかえ、北は氷川ひかわの森を望んで極楽水ごくらくみずへと下くだつて行き、西は丘陵の延長が鐘かねの音ねで名高い目白台めじろだいから、『忠臣蔵』で知らぬものはない高田たかたの馬場ばばへと続いている。

この地勢と同じように、私の幼い時の幸福なる記憶もこの伝通院の古刹を中心として、常にその周囲を離れぬのである。

諸君は私が伝通院の焼失を聞いていかなる絶望に沈められたかを想像せらるるであろう。外国から帰つて来てまだ間もない頃のこと確か十一月の曇つた寒い日であつた。ふと小石川の事を思出して、午ひるすぎ後に一人幾年間見なかつた伝通院たづねを尋た事があつた。近所ふるでらの町は見違えるほど變つていたが古寺けいだいの境内けいだいばかりは昔の

ままに残されていた。私は所定めず切貼きりばりした本堂の古障子ふるしようじが欄干らんかんの腐った廊下に添うて、凡そ幾十枚と知れず淋しげに立たち連らなった有様を今もつてありありと眼に浮べる。何という不思議な縁であろう、本堂はその日の夜、私が追憶の散歩から帰つてつかれて眠った夢の中うちに、すっかり灰になつてしまつたのだ。

芝の増上寺の焼けたのもやはりその頃の事だと私は記憶して
る。

半はんとし年ほど過ぎてから、あるいは一年ほど過ぎていたかも知れぬ。私はその頃日記をつけていなかったたので確な事は覚えていない。或日再び小石川を散歩した。雨あまけ気を含んで重苦しい夕風が焼跡の石の間に生えた雑草の葉を吹きひるがえしているのを見た。

何しろあれだけ大きな建物がなくなつてしまつた事とて境内は
 荒野あれののように広々として重苦しい夕風は眞実無常を誘う風の如く
 処ところえがおを得顔がに勢づいて吹き廻つてゐるように思われた。今までは本
 堂さえぎに遮られて見えなかつた裏手の墳墓が黒焦げになつたまま立っ
 ている杉の枯木の間から一日に見通される。家康公いえやすこうの母君の墓
 もあれば、何とやらいう名高い上しようにん人の墓もある……と小さい
 時私は年寄から幾度となく語り聞かされた……それらの名高い尊
 い墳墓も今は荒れるがままに荒れ果て、土塀の崩れた土から生え
 た灌木すすきや芒の茂りまたは倒れた石の門に這いまつわる野蔦のつたの葉が
 無常を誘う夕風にそよぎつつ折々軽い響を立てるのが何ともいえ
 ぬほど物寂しく聞きなされた。

伝説によれば水戸黄門が犬を斬つたという寺の門だけは、幸にして火災を逃れたが、遠く後方に立つ本堂の背景がなくなつてしまつたので、美しく彎曲した彫刻の多いその屋根ばかりが、独りしよんぼりと曇つた空の下に取り残されて立つ有様かえつて殉死の運命に遇わなかつたのを憾み悲しむように見られた。門の前には竹矢来たけやらいが立てられて、本堂再建さいこんの寄附金を書連かきつらねた生々しい木札が並べられてあつた。本堂は間もなく寄附金によつて、基督キリスト新教の会堂の如く半分西洋風に新築されるという話：
…ああ何たる進歩であろう。

私は記憶している。まだ六ツか七ツの時分、芝の増上寺から移つてこの伝通院の住職になつた老僧が、紫の紐をつけた長柄ながえの駕か

籠ごに乗り、随喜の涙に咽むせぶ群集の善ぜん男なん善ぜん女にょと幾多の僧侶の行列に送られて、あの門の下を潜くぐって行つた目覚しい光景に接した事があつた。今や [Democratie] 《デモクラシー》と Positivism 《ポジチビズム》の時勢は日一日に最後の美しい歴史的色彩を抹殺して、時代に後おくれた詩人の夢を覚さねば止むまいとしている。

*

安藤坂あんどうざかは平かに地ならしされた。富坂とみざかの火避地ひよけちには借家しゃくやが建てられて当時の名残なごりの樹木二、三本を残すに過ぎない。水戸みとは藩邸はんていの最後の面影おもかげを止めた砲兵工廠ほうへいこうしようの大きな赤い裏門は何

処へやら取除とりのけられ、古びた練堀ねりべいは赤煉瓦に改築されて、お家

騒動の絵本に見る通りであつたあの水門すいもんはもう影も形もない。

おもてまち
表町

の通りに並ぶ商家も大抵は目新しいものばかり。以前

この辺の町には決して見られなかつた西洋小間物屋、西洋菓子屋、西洋料理屋、西洋文具店、雑誌店の類たぐいが驚くほど沢山出来た。同じ糸屋や呉服屋の店先にもその品物はすっかり変つている。

かつては六尺町ろくしやくまち

の横町から流派りゆうはの紋もん

所どころをつけた柿色

の包みを抱えて出て来た稽古通いの娘の姿を今は何処いずこに求めよう

か。久堅町ひしかたまちから編笠あみがさを冠かぶつて出て来る鳥追とりおいの三味線を何処

に聞こうか。時代は変つたのだ。

洗髪あらいがみに黄楊つげの櫛くしをさした若

い職人の女房が松の湯とか小町湯とか書いた銭湯せんとうの暖簾のれんを搔分

か。久堅町ひしかたまちから編笠あみがさを冠かぶつて出て来る鳥追とりおいの三味線を何処

けて出た町の角には、でくでくした女学生の群むれが地方訛なまりの嘆賞の声を放つて活動写真の広告隊を見送っている。

今になって、誰一人この辺鄙へんぴな小石川の高台にもかつては一般の住民が踊の名人坂東美津江ばんどうみつえのいた事を土地の誇となしまた寄席よせで曲きょく弾びきをしたため家元から破門された三味線の名人常磐津とぎわづきん金蔵ぞうが同じく小石川の人であつた事を尽きない語かたりぐさ草にした

ような時代のあつた事を知るものがある。現代の或批評家は私が芸術を愛するのは巴里パリを見て来たためだと思つているかも知れぬ。しかしそもそも私が巴里の芸術を愛し得たその Passion その Enthusiasme の根本の力を私に授けさずてくれたものは、仏蘭西フランス人が Sarah Bernhardt に対し伊太利イタリヤ人が Eleonora Duse に対するよ

うに、坂東美津江や常磐津金蔵を崇拜した当時の若衆の溢れ
 漲る熱情の感化に外ならない。哥沢節を産んだ江戸衰亡期の唯
 美主義は私をして二十世紀の象徴主義を味わしむるに余りある
 芸術的素質をつくつてくれたのである。

*

夕暮よりも薄暗い入梅の午後牛天神の森蔭に紫陽花の咲出
 る頃、または旅烏の啼き騒ぐ秋の夕方沢蔵稲荷の大榎
 の止む間もなく落葉する頃、私は散歩の杖を伝通院の門外なる大
 黒天の階に休めさせる。その度に堂内に安置された昔のままな

る びんずるそんじや 賓頭盧尊者 の像を撫なぜ、幼い頃この小石川の故ふるさと里で私が見馴れ聞馴れたいろいろな人たちは今頃どうしてしまつたらうと、そぞろ当時の事を思い返さずにはいられない。

そもそも私に向つて、母親と乳母うばとが話す桃太郎や はなさかじじい花咲爺の物語の外に、最初のロマンチズムを伝えてくれたものは、この大黒様の縁えんにち日ひに欠かさず出て来たカラクリの見世物みせものと つじこうしや辻講つじこうしやの爺おやさんとであつた。

二人は何処から出て来るのか無論私は知らない。しかし私がこの世に生れて初めて縁日えんじつというものを知つてから、その後ご小石川を去る時分までも二人の爺おやは油烟ゆえんの灯あかりの中に幾年たつても変らないいその顔を見せていた。それ故あるいは今でも同じ甲子きのえねの夜よに

は同じ場所に出て来るかも知れない。

カラクリの爺は眼のくさつた元氣のない男で、盲目の歌うような物悲しい声で、「本郷駒込吉祥寺八百屋のお七はお小姓の吉三に惚れて……。」と節をつけて歌いながら、カラクリの絵板につけた綱を引張っていたが、辻講釈の方は齒こそ抜けておれ
 眼付のこわい人の悪るそうな爺であつた。よほど遠くから出て来るものと見え、いつでも鞋に脚半掛け尻端折という出立で、
 帰りの夜道の用心と思われる弓張提灯を腰低く前で結んだ真田の三尺帯の尻ツペたに差していた。縁日の人出が三人四人と次第にその周囲に集ると、爺さんは煙管を啣えて路傍に蹲踞んでいた腰を起し、カンテラに火をつけ、集る人々の顔をずいといと見廻

しながら、扇子せんすをパチリパチリと音させて、二、三度つづけ様に鼻から吸い込む啖たん唾つばを音高く地面へ吐く。すると始めは極く低い皺しわ噎がれた声が次第次第に専門的な雄弁に代つて行く。

「……あれエツという女の悲鳴。こなたは三本木さんほんぎの松五郎まつごろう、賭場とばの帰りの一杯機嫌、真暗な松並木をぶらぶらとやつて参ります……」

話が興味の中心ちかづに近いて来ると、いつでも爺さんは突然調子を変え、思いもかけない無用なチャリを入れてそれをば聞手の群集から金を集める前提にするのであるが、物馴れた敏捷な聞手は早くも氣勢を洞察して、半開はんびらきにした爺さんの扇子がその鼻先へと差出されぬ中うちにばらばら逃げてしまふ。すると爺さんは逃げ後おく

れたまま立っている人たちへ面当がましく、「彼奴ら人間は
 お飯喰わねえでも生きてるもんだと思つていやがら了。 昼 鳶
 の持逃野郎奴。」なぞと当意即妙の毒舌を振つて人々を笑わせ
 るかと思うと罪のない子供が知らず知らずに前の方へ押出て来る
 のを、また何とかいつて叱りつけ自分も可笑そうに笑つては例の
 啖唾を吐くのであつた。

縁日の事からもう一人私の記憶に浮び出るものは、富坂下の
 菟菟闇魔の近所に住んでいたとかいう瞽女である。物乞を
 するために急に三味線を弾き初めたものと見えて、年は十五、六
 にもなるらしい大きな身体をしながら、カンテラを点した薦の
 上に坐つて調子もカン処も合わない「一ツとや」を一晩中休みな

しに弾いていた。その様子が可笑しいというので、縁日を歩く人は大抵立止つては錢を投げてやった。二年三年とたつ中に瞽女は立派な専門の門かどづけ附になつて「春雨」や「梅にも春」などを弾き出したがする中うちいつか姿を見せなくなつた。私は家の女中が何処から聞いて来たものか、あの瞽女は目も見えないくせに男と密通くついて子を孕はらんだのだと噂しているのを聞いた事がある。

これも同じ縁日の夜よに、一人相撲ひとりずもうというものを取つて錢を乞こう男があつた。西りようこく、両りようこく国、東、小柳こやなぎと呼ぶ呼出やつこし奴ぎようから行司じまでを皆一人で勤め、それから西東の相撲の手を代り代りに使い分け、果はては真裸まっぱだか体のままでズドンどろと土ころがの上に転る。しかしこれは間もなく警察から裸はだか体になる事を禁じられて、それなり縁

日には来なくなつたらしい。

*

金剛寺坂こんごうじざかの笛熊ふえくまさんというのは、女髪結おんなかみゆいの亭主で大工

の本職ほんしやくを放擲うっちゃやつて馬鹿ばか囃子ばやしの笛ばかり吹いている男であつた。

按摩あんまの休きゆう斎さいは盲目めくらではないが生付なりいての鳥目とりめであつた。三味

線弾せんきになろうとしたが非常に癩かんが悪い。落話はなし家の前座まへざになつて

見たがやはり見込みこがないので、遂ついに按摩あんまになつたという経歴けいれきから、

ちよつと踊おどもやる落話おとしばなし話わもする愛嬌あいきよう者ものであつた。

般若はんにやの留とめさんというのは背中一面はらに般若はんにやの文身もんしんをしている

若い大工の職人で、大タブサに結った鬘まげの月代さかやきをいつでも真まつき青おに剃おっている凄おいような美男子であつた。その頃にはまだ鬘まげに結おっている人も大分残おつてはいたが、しかし大方は四十を越おした老としより人ひとばかりなので、あの般若おとわやの留おとわやさんは音羽屋おとわやのやつた六三ろくさや佐七さしちのようなイキないナセな昔むかしの職人の最後の面影おもかげをば、私の眼まなこに残のこしてくれた忘れわすれられない恩人おんじんである。

昔は水戸様から御扶持ごふちを頂たかいでいた家柄いへがらだとかいう棟梁とうりようのせがれ倅せがれに思おも込まれて、浮名うきなを近所うぢに唄うたわれた風呂屋ふろやの女の何なにとやらいしんなみものうのは、白浪物しらなみものにでも出て来きそうな旧時代ふるいじだいの淫婦いんぷであつた。江戸時代の遺風いふうとしてその当時の風呂屋ふろやには二階にがいがあつて白粉おしろいを塗ぬつた女おんなが入浴いりよくの男おとこを捉とらえて戯たわむれた。かくの如ごとき江戸衰亡せいうき期の妖あや

艶なる時代の色彩を想像すると、よく西洋の絵にかかれた美女の群むれの戯れ遊ぶ浴殿よくでんの歓楽さえさして羨むには当るまい。

*

小石川は東京全市の発達と共に数年ならずしてすっかり見違えるようになってしまおうであろう。

始めて六尺横町ろくしやくよこちようの貸本屋から昔のままなる木版刷もくはんずりの『八犬伝はっけんでん』を借りて読んだ当時、子供心の私には何ともいえな

い神秘の趣を示した氷川ひかわの流れと大塚の森も取払われるに間もあるまい。私が最後に茗荷谷みよがだにのほとりなる曲亭馬琴きよくていばきんの墓を尋

ねてから、もう十四、五年の月日は早くも去っている……。

明治四十三年七月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伝通院

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>